

広報TSB

第15号

令和元年度 前期

TOHOKU SEIKATSU BUNKA
UNIVERSITY & JUNIOR COLLEGE

学長就任にあたって

東北生活文化大学・東北生活文化大学短期大学部

学長 佐藤 一郎



私は、宮城県古川市（現・大崎市）に生まれ、まもなく仙台市に移り、高校卒業までおりました。その後、東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻に入学し、ドイツ留学の四年間を除けば、上野の東京藝術大学に四十五年間通い続けました。教える立場になってからは、三十四年間、芸術家養成機関の教官、教員として、美術教育、美術研究、大学運営に従事してきました。定年後、金沢美術工芸大学大学院専任教授として五年間勤め、平成三十一年四月に、東北生活文化大学・東北生活文化大学短期大学部の学長に着任した次第です。

子どもの頃から、絵を描くのが好きで、しかも小学、中学、高校と、美術教師に恵まれ、クレパス画、水彩画、油彩画を描いてきました。いわば、宮城県、それも仙台市で成長したおかげで、画家としての道を歩むことができたのです。その私を育ててくれた宮城県、それも仙台市に、何らかの恩返しができたらということで、五十四年ぶりに故郷に戻ってきました。

三島学園が発足した一九〇〇年といえば、万国博覧会が開催された年です。日本の生活と文化が、ヨーロッパに大々的に紹介され、好評を博しました。その結果、ヨーロッパにおいて、ジャポニズムが広まり、それに触発されたアールヌーボー、ユーゲントスタイル、アートアンドクラフトなどの生活文化に根ざした芸術運動が起き、さらには

さらに、本年度から「家政学部生活美術学科」は改組され、「美術学部美術表現学科」が新たに発足しました。本学科は、これまでの「絵画、彫刻、工芸、デザイン」に加えて、「映像・アニメーション」を担当する教員も揃え、美術の高度な専門的知識と技能を身につけ、東北の地域創生に貢献できる人間性豊かな人材を養成することを目指しております。

学長職も四ヶ月目を迎え、六月には、体育祭に参加しました。私は、高校時に応援団の副団長をしていた当時を思い出し、急遽多くの学生の前で定期戦のエールをしたところ、学生の実行委員長もエールで応えてくれました。実行委員は全員お揃いの、「staff」と記されたTシャツを着ていましたが、九〇度右回転すると「令和」と読めるのです。機知に富んでいます。また、五月下旬、食物栄養学専攻の学生が、三五〇円の食券を売りにきました。買い求め、翌週、調理実習室横の、百席ぐらいの食堂で学生も教職員もニコニコ顔で食べました。最近毎週あり、貧血気味の人、高齢者の人に適した食事と、私も随分と食生活の栄養についても勉強ができています。

このような和気あいあいとした本学の雰囲気

印象派の画家たちにも多大な影響を与えました。三島学園の開学当時の写真や、戦後の染色、編物、織物などのテキスタイル作品を鑑賞すると、このような当時のヨーロッパにおける、生活に結びついた文化と芸術に親近感をもち、かつ和服などの伝統文化にも着目が見られていたように思えます。異文化との出会い、あるいはやりとりによって、東北という地に新たな生活と文化を生み出そうとしてきたのではないのでしょうか。

東北生活文化大学家政学部では、これまで培ってきた家政学教育の伝統を生かし、温故知新の精神で、少子化、高齢化、複層化という現代社会に現実的に対応し、今を生きぬく新しい「衣・食・住」の生活文化を生み出そうとしております。



大学家政学科

短信



令和元年度春・夏の家政学科の近況をお知らせします。
四月に宮前理特任教授、宮澤孝子講師が新たに服飾文化専攻の教員に、また五月には小野真実教授が健康栄養学専攻の教員として加わりました。これからの活躍が大いに期待されます。

四月三日に入学式があり新入生（服飾文化専攻八名、健康栄養学専攻三〇名）および編入学生（健康栄養学専攻三年次二名）を迎えました。健康栄養学専攻の新入生が例年よりも少なかったものの、男子学生は八名で、四年生で三十一名と遂に二〇%を超えました。「男子学生の多い

管理栄養士養成施設」というのが本専攻の特徴に成りつつあり、管理栄養士という職業の魅力の高校生男子生徒への浸透が伺えます。今年度は入学時の学外でのオリエンテーションキャンプを実施



▲オリエンテーション

せず、学内で二日間かけた集中的なガイダンスで十分な新入学指導を行い、懇親会では教員・ヘルパー学生と新入生間での交流を大いに深めました。

新入生たちは徐々に授業にも慣れ、数々の学友会イベントやサークル活動への積極的な参加も見受けられます。

六月二十二日、七月十三日には恒例のオープンキャンパスが開催され、服飾文化専攻では昨年を上回る参加者を迎える事ができ、今後が期待されます。本学科での教育内容を紹介する工夫を凝らしたイベントと、来訪者と教員・学生とのより交流を深める企画は好感を持っていただけたようでした。

六・七月は教育実習や健康栄養学専攻の隣地実習といった学外実習が佳境を迎えており、学生たちが続々実習先へ赴き、日頃の学習の成果を発揮しております。間もなく学生たちは定期試験を迎え、特に四年生は課題研究、就職活動、受験勉強や残りの学外実習と続きますが、これらを乗り越えて一層の成長を遂げてくれるものと期待しております。

大学美術表現学科 (生活美術学科)

短信



日頃から本学科にご理解とご協力を賜り、誠にありがとうございます。

今年四月から本学に念願の美術学部が開設されました。同時にデザイン・メディア芸術コースの教授として鈴木専

先生が着任されました。また、一号館にデザイン・メディアルームが新設され教育研究環境が大変充実いたしました。

美術学部美術表現学科一年次として四十五名の新入生を迎え恒例のオリエンテーションキャンプを秋保温泉岩沼屋旅館で行いました。その後、二次東京研修旅行があり、国立西洋美術館の企画、常設展や国立新美術館など様々な展覧会などで充実した研修を行いました。

生活美術学科四年生は現在教育実習、就職活動本番を迎えています。自身の将来を見据えながら卒業制作研究に、就職活動に努力してほしいと思います。

第八十二回河北美術展では卒業生の鈴木雅之さんが絵画部でJAL賞、その他八人が入選、在学生では一年生の岩渕伶奈さん、三年生の吉田瀬七さん、四年生の佐藤李菜さんが入選。

晩翠画廊特別企画蒼龍ワインラベルコンペで二年岩渕伶奈さんが晩翠画廊賞。

大和町出身の歌人原阿佐緒を記念した短歌大会「第二十回原阿佐緒賞」が行われ、周年記念グッズとして四年次早坂明音さんのデザインした木製しおりとA4ファイルが記念販売されました。



▲デザイン・メディアルーム

「版ゼミ 脱はだか展」、ギャラリーエチゴで行われました。
平成九年度卒の有志による展覧会「ライフワーク20」
展がメディアアークで開催。

森敏美名誉教授と卒業生、在学生とのコラボ」とつか
ひつかあすりかゑ」展 SARP。

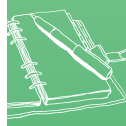
第四十五回生活美術学科コンクールギャラリーエチゴ賞
受賞者作品展が同ギャラリーで行われ、二年生の嶋田可凜
さん、小川七恵さんが出品しました。

その他授業はもちろん、地域連携事業、研究、制作発表
活動等、学生、卒業生、教員の活動も充実しています。

今後とも皆様のご理解とご協力を賜りますようお願い
申し上げます。

短大生活文化学科

短信



生活文化学科は、平成三十一年三月十五日に食物栄
養学専攻二十九名、子ども生活専攻四十一名の卒業生
を送り出しました。食物栄養学専攻では平成二十六年
度から五年連続、子ども生活専攻は平成二十年度から
十一年間連続して就職率一〇〇%を達成しています。

平成三十一年四月、食物栄養学専攻に二十九名、子ど
も生活専攻に五十一名が入学し、新たな年度が始まりま
した。勉強だけでなく、ボランティアへの参加など、短大で
の生活を送っています。

今年度前期の主な行事を紹介いたします。

学科の行事

○四月五・六日 一年生オリエンテーション・キャンプ、
二年生研修旅行(かみのやま温泉)

○六月十五日 体育祭

食物栄養学専攻

二年生の実習

○六月・十二月 校外実習

小学校、保育所、自衛隊、特別養護老人ホームなど
で給食管理実習を行います。

○八月二十二日 フードエンタテインメント演習

(株式会社江陽グランドホテル)

その他食品を扱う事業所への見学も予定しています。
栄養士としての実力アップ、就職試験・編入試験対策
に有効な栄養士実力認定試験(十二月)の受験を勧め、
受験対策講座を行っています。

一年生の実習

○八月六・九日 施設見学(短大附属ますみ保育園)

○八月二日 施設見学

(セントラルキッチン、仙台医療センター)

子ども生活専攻

二年生の実習

○五月七日 マナー講座

浅野純子先生を招き、実習・就職活動に向けて講
演していただきました。

○五月二十七日・六月七日、六月二十四日・七月五日
保育所実習Ⅰ、Ⅱ

○七月二十二日・八月二日 施設実習

一年生の実習

○六月十二・二十五日 幼稚園・保育所見学実習

(短大附属ますみ幼稚園・保育園)

○六月十二・二十五日 施設見学実習

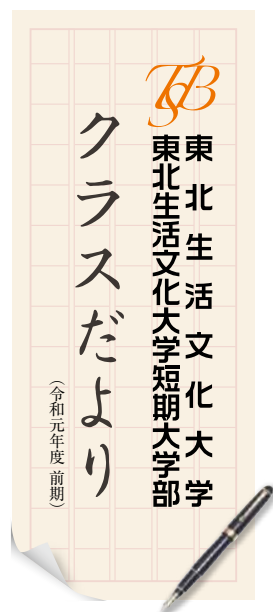
(丘の家こどもホーム)

○九月二・九日 幼稚園基礎実習Ⅰ

(短大附属ますみ幼稚園)



▲オリエンテーションキャンプ



大学服飾文化専攻 1年

この三月に担任を務めていたクラス十二名を無事に送り出し、四月から新入生の担任を拝命し、心機一転、女子学生七名・男子学生二名、合計八名の学生と共に新しい大学生活のスタートを切りました。入学式直後の緊張した表情も一週間ほどはぐれ、この原稿を執筆している七月中旬時点では、すっかり学校にも慣れ各人のペースをつかみつつあると感じています。現在、毎週最低二回は講義で全員と顔をあわせ、その講義を通じて一人ひとりのキャラクターの把握に努めているというのが、担任視線での近況になります。大学四年間は過ぎてしまえばアツと言う間ですが、四回の春夏秋冬を共に過ごすことになりました。この間、各人の様々な過程を踏んだ成長を楽しみに、しかし緊張感を持って日々を大切に一緒に人生を前進したいと考えています。

大学服飾文化専攻 2年

九月に家政特別演習(研修旅行)が計画されています。今年は神奈川県(川崎市・横浜市)と東京都内を訪れます。事前に研修先の施設や企業などを調査し、何を学ぶのかという目的意識を明確にしたいと考えています。そのため、七月と八月に何回か大学に集まってもらう必要があります。九月の前日にも最終確認、打ち合わせをする予定です。全員が学ぶ意欲や動機を強く持つて有意義な研修旅行となることを願っています。

二年生という時期は三年生への進級を控え、将来の進路を固めるための基礎作りと位置づけられます。三年生からは専門のコースに分かれて学びます。今後もご支援をよろしく願ひ申し上げます。

大学服飾文化専攻 3年

大学生活も三年目を迎えました。学生たちは、それぞれの進路目標に応じて、衣料管理士の資格や教職免許などの取得に必要な専門科目を中心に学んでおり、時間割(履修科目)も実に多様です。

今後、後期からの「課題研究Ⅰ(必修)」では、個別に研究テーマを設定し、配属先の指導教員のもと、調査や実験などに取り組み、二月の発表会に向けて、専門性と汎用的な技能に磨きをかけていくことになります。

これから学生二人ひとりが、どのように成長し、どのような進路を選択していくのか、期待しつつ、見守っていききたいと思います。

大学服飾文化専攻 4年

早いもので、四年次前期を終えようとしています。

四月のガイダンスには、今年度の目標を各自が立て、クラスの仲間と共有する機会をもちました。中でも卒業・就職が目標で、単位の修得・課題研究・就活が前期の中心となりました。学芸員希望者は夏季中に実習旅行に臨みます。

クラスの状態は、少しずつ進路が決まりつつあります。就活では不安や焦りを感じる事も多いでしょうが、様々な企業様との出会いを大切に、最後まで活動が続ける事が大切です。これからも方向性を見出せるようにサポートして参りたいと思います。

大学健康栄養学専攻 1年

この四月、男子七名と女子二十三名の計三十名が、おそらく不安と期待を抱いて入学して来たものと思います。あれから早三ヶ月が経ちましたが、今現在のクラスの様子を簡潔に申し上げますと、「皆非常に仲が良く、元気なクラス」です。仲と元気が良すぎて、時には講義中などに担当教員から注意を受けることもたびたびのようですが、そこはきちんと指導していきます。七月下旬には前期の試験が実施されるため、その結果が大いに気になるところですが、それ以上にそんな彼女らが今後どのように成長していくのか、大変に楽しみです。皆の元気溼刺とした姿を見るにつけ、今後共に、絆強く、切磋琢磨していけるクラスであり続け

られるよう支援していきたいと考えております。

大学健康栄養学専攻 2年

健康栄養学専攻二年生は、オーブンキャンパスや介護施設などでボランティアに自主的に参加する学生が始めました。今後、様々なボランティアの依頼が増えるため、もう少し積極的に参加してもらいたいものです。また、それらの活動は、次年度からの校外実習において生かせることが多いと思っています。同様に、学内の学友会活動などにも積極的に参加してほしいものです。二年次では専門科目が増え、面談では苦手な科目が挙げられていたが、前期試験では努力が報われるよう期待しています。健康に留意して夏季休業を楽しんでもらいたいと思っています。

大学健康栄養学専攻 3年

三年生は小学校や保育所、高齢者福祉施設等で臨地実習を行います。その準備のために専門の講義・実験・実習が多くなり、日々忙しく過ごしています。さらに管理栄養士の国家試験対策講座も始まりました。三年生は週二コマ、四年生になると週六コマになります。実際の国家試験は午前・午後合わせて五時間も行われるため、体力と集中力が必要です。毎日勉強する習慣を身につけましょう。また臨地実習に向けて社会人としてのマナーを身につけてもらいたいと思います。ご家庭でも協力いただければ幸いです。

大学健康栄養学専攻 4年

気がつけば入学して四回目の春を迎え、学生は就職活動や学外実習で忙しい毎日を過ごしています。就職活動では早くも複数の内定を得た学生もいて、求人への好調を実感しています。学外実習では管理栄養士の勉強はもとより、社会人になる厳しさも学んできてきているようです。同じ門をたたいても、それぞれの道へと学生は進んでいきます。担任としてできる限り力になりたいと思っています。来年三月の本番を控え、国家試験対策講座も本格化しています。受験した全員が合格、そんな未来を目指して力を合わせて頑張ってもらいたいと思います。

大学美術表現学科 1年

美術学部になって、はじめての新生を迎えました。

「絵が得意」「工作やものが好き」「色や形に興味がある」といった学生たちが集い、美術という同じ目標で仲間たちと充実した大学生活を送っています。

授業では、今年から始まる「地域創生演習」で、地域社会に美術をととした貢献を目指して、課題発見、問題解決の基礎的な知識や手法を学んでいます。また行事では、四月に、オリエンテーションキャンプ、五月の東京研修旅行、六月の体育祭と、体験してきました。

現在、前期の課題やレポートの提出、試験の準備に追われています。

大学生活美術学科 2年

生活美術学科として最後の学年となる二年生は、一人ひとりが様々な表現方法を試みつつ個性的な作品を制作、各々の進むべき未来をより明らかなものにしようとして取り組み始めています。グループ展や版画ゼミでの展覧会、またはweb上で作品を発表、といった積極的な学生もいれば、放課後の静かなアトリエで仲間と集まって課題や制作を進める学生、または石膏像と二人対峙しデッサン続ける学生もいます。彼女たち彼らの何気ない今日の一瞬瞬がとてつもなく尊く素晴らしいものであり、これから制作される作品の大切な一部となつてゆくのだな、と確信しております。

大学生活美術学科 3年

三年次は、四月にはそれぞれのコースに別れ専門性を活かした卒業研究に向けて取り組んでいくばかりとなり、身の引き締まる年となつて参りました。

今年度の活躍として、コンクール等受賞作品発表以外でも積極的に友人同士でのグループ展の企画発表を行うなど、制作へ対する意欲的な姿が見受けられました。その他の展示におきましても三年次が主となり、他学年を取りまとめるなど頼もしくも思えました。

四年次になると教育実習や就職活動も本格的になつてまいり

ます。これまで学んできた事を最大限に活かし個々に励んでくれることを期待し、最終学年として目標に向かって活躍して欲しいと願っております。

大学生活美術学科 4年

最大の課題・目標として、挑戦心をかき立てる卒業制作に打ち込む傍ら、学外での発表にも意欲を燃やした勇者達がニュースを届けてくれました。

佐藤李菜さんが令和最初の河北展に見事入選し、十回目の節目を迎えた「晩翠画廊企画展蒼龍ワイナールコンペX」には、阿部桃子さんと菅村明生さんの作品が展示されました。また、大和町出身の歌人、原阿佐緒の功績を讃えることを目的として行われてきた「原阿佐緒賞」の二十回記念グッズを早坂明音さんがデザインしました。

朗報がクラスに活力を与える日々が卒業まで続くことを願っています。

短大食物栄養学専攻 1年

栄養士の免許取得を目指して、短大での生活に期待と不安で胸を膨らませた三十名が入学しました。ガイダンス、オリエンテーションキャンプ、講義、実習など初めてのことがばかりで戸惑いを感じる様子もみられましたが、時間が経つとともに少しずつ慣れてきたようです。六月中旬に開催された体育祭では、当人たちにとても予想外の総合優勝でした。成績発表のアナウンスに最初誰も気がつかず、少しおっとりとしたクラスの雰囲気が見られ微笑ましい光景でした。現在は、オープンキャンパスの学生スタッフ活動、前期試験に向けての勉強に励んでいます。これからクラスの皆で手を取り合いながら、そして切磋琢磨しながら目標に向かって一歩ずつ歩みを進めてほしいと願っています。

短大食物栄養学専攻 2年

食物栄養学専攻二年生の今日この頃は、成長著しいといつたところですが、

学年が進むと授業や実習の内容が高度になり、予習や準備の

ための時間も増えてきますが、皆よく乗り越えているようです。四月以降は就職活動にも勢力的に取り組んでおり、七月初旬で半数近くの学生が就職先の内定を決めています。

授業以外の場でも積極的に活動しており、十月に開催される学園祭では、毎年恒例となつている、健康に配慮したメニューを提供するレストランを開店するべく、現在企画の真最中です。

この一年で素晴らしい成長を見せてくれた学生諸君の今後が、ますます期待されます。

短大子ども生活専攻 1年

四月、子ども生活専攻第十五期生は、五十二名でスタートを切りました。入学式直後のオリエンテーションキャンプではまだぎこちない様子も見られましたが、六月の体育祭では、真剣に試合に臨む仲間を一生懸命応援したり、長縄跳びに優勝してみんなで喜んだり、クラスのまとまりも強まってきました。今は、十月に行われる大学祭に向けてテーマを決め、内容を考えて、協力しながら準備を進めているところです。

先日行われた附属幼稚園・附属保育園での見学実習では、学校で学んだことと観察したことが繋がったという感想が多く聞かれ、幼児教育の大切さを実感し、保育者となることへの決意を新たにしました。

二年間はあつという間です。同じ志をもつ仲間を大切にしながら、日々有意義な学生生活を送つてほしいと願っています。

短大子ども生活専攻 2年

四週間の保育所実習、二週間の施設実習と、初めての「本実習」を経験しました。日誌や指導案作成など、つらく大変なこともありました。子どもたち、利用者の方たちから元氣とパワーをもらいながら、たくさん学ぶ、大変充実した実習生活を送ることができました。八月は補講が入る日が多く、なかなかまとまった休みがとれませんが、十月から始まる幼稚園教育実習の準備や就職活動など、短い夏休みを有効に使ってほしいと思います。もちろんリフレッシュすることも忘れずに。短大生活も早いものであと半年。将来を見据え、それぞれの目標に向かってさらに成長を期待しています。

大学 家政学科 特任教授

宮前 理

専門分野: 臨床心理学

主な担当科目: 教育相談、教育心理学、教職実践演習、
教育実習事前事後指導、専門研究



昨年度まで宮城教育大学の教職大学院で教師を目指す学生・大学院生や現職教員の方にカウンセリングや教育相談などを指導してきました。ご縁があって本年度から東北生活文化大学に勤務することになりました。どうぞよろしくお願いいたします。

私の専門は臨床心理学です。様々な心の悩みを抱える方々への心理テストや心理療法の実践を通して「こころ」について、また「人間」について研究する領域です。私の研究テーマは、精神科クリニックや精神病院で「心の病」の患者さんたちと30年以上にわたって続けてきた面接経験の中で育まれてきました。

特に統合失調症の方の「幻聴」や「妄想」という症状に向き合い深い絶望や無力感を経験する中から、では「現実とはいったい何か」という主題が浮かび上がってきました。そして普遍的逆転移、此岸と彼岸、絶対的受動性、夢の現実性と現実の夢幻性などの観点から特に言葉の役割とそのイメージの解釈に取り組んできました。近頃は、永久(とこしえ)の静寂、宇宙(コスモス)の沈黙という2つのイメージを心理療法の中核的センスとして捉え直しを試みています。

25年ほど前からスクールカウンセラーの派遣が開始され、私も中学校、高校で生徒や保護者の皆さんのカウンセリングを実施する機会を得て経験の幅が広がりました。学校現場では医療領域とは異なり、さまざまに臨機応変の対応が求められます。本学では主に教員免許状取得を目指す学生たちに、カウンセリングを理解し生徒への教育相談に活用できる教員を育てていきたいと思っています。

大学 美術表現学科 教授

北折 整

専門分野: 絵画

主な担当科目: 絵画



私の「研究」は「絵画の制作」です。この様に言いますと、私は幼児の頃から絵を描いていますので、このかた50年を越えて研究にいそしんできたことになります。但し「研究」を、社会性を帯びた知的なプロセスを経た専門的な学びに限定すれば、私の場合は学生そして教員として制作した期間、凡そ30～40年ということになります。学部時代は「油画専攻」で油彩の制作を中心に、大学院では「油画技法材料研究室」で様々な描画材や支持体について学びました。その後本学に奉職した後は、これらの知識や経験を基に油彩の他、テンペラやアクリル、エンコウスティック(ろうを使用した描画技法)や墨彩等、様々な制作に手を出して、今では少々收拾がつかない状況にあります。

さて、「研究」にはその研究対象の意味や内容を、多角的な知見によって客観的・相対的にとらえ、言葉にしていくなかで作業が含まれていると思います。そのために種々の学問を統合する場として大学が機能していることは言うまでもありません。従って子どもの制作を「研究」と呼ぶことには抵抗がある。しかし、絵を描くこと「絵画の制作」に主体を置くと、良い絵を描くためにそれが「研究」である必要は全くありません。サン・テグジュペリは『星の王子様』の中で純粋な心(ここでは純粋に描くこと)を忘れてしまった大人に、「だれも、はじめはこどもだった(しかし、そのことを忘れずにいるおとなは、いくらいもない。)」と言っています。私もまさに忘れてしまった大人の一員ですので、なかなか制作を続けていくことが難しい。そのため「研究」することすなわち大人なりの意味づけや動機づけをすることで、何とか絵を描き続けられているのだと思います。

私の研究

短大 生活文化学科 特任准教授

佐藤 深雪

専門分野: 国語教育、小学校教育全般、日本語学

主な担当科目: 日本語基礎、国語表現法、保育内容「言葉Ⅱ」



先日、本学系列高等学校の2年生を対象に『ことばで遊ぶ』と題して授業をしました。授業の導入になぞなぞを出しました。「掴めるけど、握れないものなあんた?」高校生の答えは、「夢、チャンス、こつ、腕、特徴、感覚、勝利、政権、(私の)心、(彼の)胃袋、財布の紐・・・」となかなかのもの。言葉で遊びながら日本語の面白さ、奥深さを体感してもらいました。私の専門は、国語教育です。これまで「ことば」を追究する活動を通して、論理的思考力を育て、言語感覚を磨き表現力を育てる授業を目指して取り組んできました。

この4月から短大の学生に「日本語基礎」と「国語表現法」の授業をしています。文章表現の授業の後には、毎回、提出物の添削があります。学生が書いた大量の文章を前にして、どうすれば、彼らの文章力を伸ばすことができるのか思い悩んでいる毎日です。業務日誌やお便り、連絡帳、プレゼン原稿など、実践的な文章を要求される場面は日常的に数多くあります。何としてでも社会に出る前に、自分の意見を論理的に分かりやすく述べる力を身に付けてもらいたい。

「分かる、伝わる文章」を書くために必要なことは何か。それを学生に知識として教えることは簡単です。しかし、国語は、体育や音楽と同じ技能教科としての側面も持っています。知識として理解しても、技能として身に付かなければ使えません。相手意識、目的意識を明確に持って、読み手の納得と共感を得る文章を書くことが大切です。書くことは、考えることです。常に自分に問いかけながら推敲することで文章は磨かれていきます。

学習支援センターで、学生の文章力向上をサポートする指導も行っています。そこは、まさに「文章トレーニング」の場です。日々トレーニングを積み重ねることが必須です。

短大 生活文化学科 講師

盛下 真優子

専門分野: 教育哲学

主な担当科目: 教育原理、教育・保育方法論、教育・保育課程論、
教育制度論



私の研究分野は教育哲学です。哲学という難しいイメージがあるかもしれませんが、つまりは「教育を哲学する」ことを専門としています。たとえば、「そもそも教育とは何か」「教育に関わる人間形成とは何か」「人間に教育は必要なのか」「教育には限界があるのか」など、教育の根本的な問いに向かっています。

私はこの教育哲学的視点に基づきながら、特に「調和」をキーワードにして研究を進めてきました。人間形成における精神と生の調和や、知識の調和、自己と他者の調和、異なる価値観の調和とは、一体いかなるものであるのかを考察し、さらに調和を巡る教育の可能性と限界を検討しています。その際にヒントにしているのが、ドイツの哲学者であるマックス・シェラー(Max Scheler, 1874 - 1928)の思想です。シェラーが活躍した20世紀初頭には、キリスト教の衰退と科学技術の台頭に伴い、「人間とは何か」が不明瞭になった最初の時代でもありました。そのような時代状況のなかで、シェラーは人間をさまざまな分野から検討し、全体的に理解することを試みています。シェラーのこの手法は、学問の細分化が進んでいる今日、分野横断的研究としてますます重要になっています。

またシェラーの思想に依拠すると、自己と他者の間にはどうしても突破できない「距離」が存在し続けます。そして、この「分からない」という他者との距離を、「分かったつもり」や押し付けをするのではなく、限界として受け入れながら、それでもなお関わろうとする姿勢こそが、調和にとって重要であると言われています。今後の研究としては、この「分からない」ことの解明と、他者理解の限界を受け入れられるような授業構成の検討をしていきたいと考えています。

名誉教授称号授与

四月二日、昨年度で退職された大学の菅並茂樹先生、森敏美先生、短大の大坪豊先生に名誉教授の称号が授与されました。長い間、本学園にご尽力いただいた先生方、本当にお世話になりました。



原阿佐緒賞二十回記念グッズ制作

本学美術学部美術表現学科、エントワデザイン株式会社、大和町教育委員会生涯学習課が連携して、原阿佐緒賞二十回記念の記念品をデザインしました。



美術表現学科の特別講義「キャラクターデザインとプロデュース」担当：佐藤寛和氏（エントワデザイン株式会社）、北折整教授、鶴巻史子准教授で、大和町に縁のある歌人、原阿佐緒氏をモチーフに考案した可愛らしくデフォルメしたキャラクター「あさおさん」制作：早坂明音さん（四年）を元に、クリアファイル、木製しおり等の記念品グッズのデザインをしました。原阿佐緒氏の短歌に登場する植物をデザインに取り入れ上品な雰囲気仕上げています。

グッズは、二〇一九年六月十五日（土）に行われた「第二十回原阿佐緒賞」表彰式の参加者に配布され大変喜ばれました。クリアファイル（二〇〇円）木製しおり（二〇〇円）は、原阿佐緒記念館で限定販売しています。

グッズ制作者 早坂明音さんから

記念品として形に残るものをデザインさせていただいてとても光

栄です。原阿佐緒氏の愛と芸術に満ちた人生に惹かれるものがあり、デザインを考案しました。短歌に登場するアネモネ、スモモの花、カタクリの花、大和町の町花であるツツジをデザインに取り入れています。

佐藤一郎新学長就任

学校法人三島学園は、理事会において、東北生活文化大学ならびに東北生活文化大学短期大学部の山田宗慶学長任期満了に伴い、新学長に佐藤一郎（さとういちろう）を選任いたしました。任期は二〇一九年四月一日から二〇二三年三月三十一日までの四年間。

新学長プロフィール

佐藤 一郎（さとういちろう）
昭和二十八年八月二十六日（七十二歳）。宮城県出身。明治美術学会会員、文化財保護修復学会会員、文化財保護委員会助成財団評議員、日本美術家連盟会員および委員。
昭和四十五年二月、東京藝術大学卒業（透視肖像の圖文部署員上げ（東京藝術大学美術館蔵）／昭和四十五年十月、（昌郎）肖像の圖文部署員上げ（東京藝術大学美術館蔵）／昭和五十六年六月、セントラル美術館油絵大賞展（ぬい五歳像）佳作受賞（宮城県美術館蔵）／平成二十六年二月、平成二十六年度宮城県芸術選奨美術（洋画）受賞。

職歴

昭和四十八年六月
ドイツ芸術交流会留学生DAADとして
ハイムブルク美術大学に留学（昭和五十二年十二月まで）
昭和五十六年四月
東京藝術大学講師 油画技法材料研究室
昭和六十二年四月
東京藝術大学助教授 油画技法材料研究室
平成五年五月
宮城県美術館石膏原型管理委員会委員（平成十二年五月まで）
平成七年四月
文部省在外研究員としてウィーン美術大学修復学科に在籍（平成八年二月まで）
平成七年四月
みやぎ夢大使（平成十七年十一月まで）
平成十二年二月
東京藝術大学教授
（油画技法材料研究室 兼任 文化財保存学保存修復油画研究室）
平成十二年四月
セナティアート・リアル審査員（平成十七年三月まで）
平成二十六年四月
東京藝術大学定年退職
平成二十六年四月
金沢美術工芸大学大学院専任教授（平成三十年二月まで）

学歴

昭和四十五年三月
東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻首席卒業
昭和四十七年三月
東京藝術大学大学院美術研究科修士課程油画修了（芸術学）
昭和五十六年二月
東京藝術大学大学院美術研究科博士課程油画専攻単位取得退学

人事異動

新任の教職員

大学・短大 学長
佐藤 一郎

大学 教授
小野 真実

大学 教授
鈴木 専

大学 特任教授
宮前 理

大学 講師
宮澤 孝子

短大 特任准教授
佐藤 深雪

短大 助手
齋藤 実花

大学 短大
学募広報課長
齊藤 繁

大学 短大 教務課
黒澤 宜子

退職の教職員

大学・短大 学長
山田 宗慶

大学 教授
森 敏美

大学 特任教授
菅並 茂樹

短大 特任教授
大坪 豊

事務職員紹介



学募広報課 齊藤 繁

四月から学募広報課に勤務しております。齊藤 繁と申します。学生の皆さんと直接かわり合うことはありませんが、高校生の皆さんに大学・短大の説明をしたり、大学の短大見学の対応をしたりといった仕事をしています。勤務して四ヶ月が経ちますが、すれ違う学生の皆さんから「おはようございます」「こんにちは」と声をかけていただき、爽やかな気持ちで仕事をすることができています。

学生の皆さんが充実した生活を送ることができるよう、支援してまいります。

PHOTO ALBUM

(令和元年度 前期)



入学式

今年度から佐藤一郎新学長が就任し、大学・短大新入生ならびに大学編入学生を迎えました。新入生の皆さん、おめでとうございます。



ウェルカムパーティー

このイベントは、在学生が新入生を歓迎する企画で、学生同士の交流を楽しみつつ、ファッションショーやクラブ・サークル紹介、クイズなどで大いに盛り上がりました(^_^)



キラ☆シャカ・ウォッチ ～自分だけの腕時計を作ろう～

長命館さくら祭りに、「ワクワクぶろじぇくと(地域連携活動)」として美術表現学科が参加。開始と同時に子どもたちでいっぱいになったブースでは、オリジナルの時計型アクセサリーを作りました。



アイリンブループロジェクト

アイリンブループロジェクトのあいりちゃん、今年も元気に咲きこぼれています。
アイリンブループロジェクト→ <http://airinblue-project.jp/>



オープンキャンパス

今年度も6回オープンキャンパス開催中です。次回は、大学祭と同時開催の10月です。



給食管理実習II

短大食物栄養学専攻2年生の「給食管理実習II」。テーマは「学校給食(対象:小学3・4年生)」。メニューは、ビビンバ風ご飯、小松菜とシメジのバター炒め、わかめスープ、オレンジゼリー、牛乳でした。



体育祭

6月15日(土)、あいにくの天気でしたが、毎年恒例の「体育祭」を開催しました。今年のテーマは、「平成で食べたもの全部、令(ゼロ)カロリーにしちゃおう〜!」。



及川潤耶氏特別講義

仙台市出身、ドイツ在住の世界的に活躍するサウンドアーティスト及川潤耶氏を講師にお迎えし、デザイン・メディア芸術特別講義を実施しました。



木のスプーンを作ろう

多賀城市の山王地区公民館において、「今年も日本一長い? 料理教室」が行われ、シリーズ内の「木のスプーン作り」を、美術学部の落合麻講師が担当しました。

就職支援センターから

◎キャリアアップ

平成31年3月本学卒業生の就職決定率は大学98.4%、短大100%でした。特に、短大はここ5年、100%の決定率という状況です。最近では求人・求職活動は好調な経済状況や人手不足感等を反映して早期化しています。早い段階から、しっかりと自己の進路目標を定めて就職活動等を行うことができるように本センターでは学生の就職を支援してまいります。

以前からいわれていますが、日本の生産年齢人口は減少し続けています。2060年には2010年の7割に落ち込むとも見込まれている中で、多くの企業が65才への定年延長を進め、再雇用の動きも検討されています。確実に働く期間は延びていくことになります。定年延長だ、再雇用だといっても高齢者を無条件に雇用する会社はありません。長く働くには長く働く自分をつくる必要があります。自分で学びキャリアアップしていくことが求められます。一方、人口知能(AI)など最先端のIT(情報技術)で仕事は第4次産業革命といわれるほど大きく変化しつつあります。現在の最先端技術も、数年後には過去の遺物になっているかもしれません。経済社会の変化や労働の機械化・雇用環境の変化等が進むなかで生き生きと働き続けるためには、卒業後も働きながら学び続ける姿勢を持ってキャリアアップしていく意識が求められます。

就職すれば学びは終わりではなく、就職は目指すキャリアを作る学びの場としてさらにキャリアアップを続けて欲しいものです。